

インバネスを着せてくれる、すんぐりした首の男が、僕を後からかゝえて小砂利の上へ下ろした。

『高橋君僕が解るか、僕は消防隊だから、小頭だから心配する事はない』

其の男が言つた。

巡查が来て僕を後手にくくつて了ふ。

それから僕は下駄を穿かされて、烏井をくゞつて海岸通りを歩るかせられた。

町の人々が軒の下へ出て、盛んに僕を見てゐる。

僕は死刑臺に曳かれる時の謀反人でゝもあるかの如く肩を聳やかして歩いた。

僕の兩脇に二人巡查が、綱を持った手をゆるめないで、僕を引き立てるのだ。

曲り角の共同便所の所に三四十人の人がかたまつて見てゐた。

僕は穿いてゐた下駄を二つとも蹴飛ばした。

警察の門の前に来た。

留置場の